

アルケイアー記録・情報・歴史  
第一六号 二〇二一年二月 五―一〇五頁  
南山アーカイブズ

特集「南山大学七十五年史掌編」

Special Issues

‘Brief Notes on Seventy-five Years of Nanzan University’



## 大学史料についての雑感

青山幹哉

『南山大学七十五年史』執筆では、私は人文学部（各学科ではなく学部全体）を担当した。その過程において調査した各史料について、感じたことをいくつか述べることにした。今回の執筆に際して閲覧・参照できた史料は、以下の通りである。

### （一）学部内

教授会資料、学部自己点検評価報告書、カリキュラム改正ワーキンググループ資料、将来構想ワーキンググループ資料、個別の聞き取りによる覚書（今回、新規作成）

### （二）学部外（大学内）

シラバス、履修要項、南山大学概要、入試広報関係資料

### （三）大学外

退職教員のインタビュー覚書（今回、新規作成）

学部史を考察する上でもっとも有効かつ重要な資料は、学部長用の教授会資料であった。年度毎に綴じられたそのファイルは、教授会構成員に配布される議事次第・審議資料等を基として、議事関連資料が挟み込まれた上、さらには教授会後に追加で貼付された書類などによって、分厚く膨らんでいた。そこには、歴代学部長の手によるメモ書きも含まれており、なかなか興味ぶかい記述を見ることができた。まさに一級史料といえるだろう。ただ、二〇〇〇年代（〇〇年代）の末頃から、やや精彩を欠く感があり、そこからおそらく教授会の形式化という時代状況の変化を読み取ることもできるだろう。

現在のところ、学部創設以来の年度別学部長用教授会資料ファイルは嚴重に保管され、機微にわたる案件や人事・身上異動等の個人情報も記載されているためか、関係者以外の閲覧は想定されていない。古い年次のファイルはすでに非現用文書となったと思われるので、早々に南山アーカイブズに移管して保存をはかるべきであろう。

次に、カリキュラム改正ワーキンググループ資料と将来構想ワーキンググループ資料（以下、WG資料と記す）について述べる。人文学部は四学科から構成されるため、ワーキンググループのメンバーも各学科から一名選出された。そのため、選出メンバーは、検討会を開催してはその意見を所属学科に持ち帰り、学科で意見聴取しては検討会で検討を重ねる、といった作業を繰り返しておこなった。その記録は公式には保存されておらず、教授会に報告された中間報告書・最終報告書、あるいはカリキュラム改正案のみが教授会審議資料として保存されていた。したがって、今回、調査したWG資料は、当時のメンバーが手元で保存していたものが主となった。そのため当然ながら、WG資料は不完全なものでしか、伝存していない。残念ながら、事務方が関与せず、教員のみによって構成される短期の委員会等では、記録・保存という観念が欠落しやすいと言わざるを得ない。検討会の議案書等は作成されているので、せめて議案書に座長がメモ書きした記録等については、作業終了後に公的な場で保存する体

制をつくるべきであろう。

三つ目は、聞き取り調査によって作成された資料の問題である。具体的には、退職教員へのインタビューと、現職教員へ質問した際の回答、である。今回は、いずれも私個人との信頼関係を軸としたため、公私の区別が付きにくくなったものもあった。また、公式の調査の場合でも、非公開を条件とする等、いくつかの制約があった。したがって、執筆に際しては、一部の例外を除いて、調査者（私自身）が聴取し理解した範囲のことを、私の責任において記述するしかなかった。記述の信憑性という観点からすれば、いささか問題が残る方法ではあるが、現実にはやむを得ない対応であったと思う。

四つ目は、デジタル資料の問題である。人文学部では、二〇一九年度から教授会資料すべてをデジタル化した。ペーパーレスとなり、当然、手書きによる書き込みは難しくなった。資料の形態が大きく変貌したのである。デジタル化の進行は、この数年で急速に進み、ほとんどの書類・記録がその対象となった。その一部は、大学のWebサイトで公開され、容易に閲覧できる。ただし、それも将来いつ削除されるか不明である以上、サイトでの公開だけでは資料保存にならない。デジタル化された資料の管理・保存については、それぞれの部局に委ねるのではなく、アーカイブズの視点から作成された保存マニュアルを必要とする段階になったと思う。将来、歴史資料として活用できる環境を整備しておかないと、気がついたら消去されていた、という事態が起こりうるのである。

また、今日においては、Eメールでのやり取りが重要な史料になりつつある。WG資料を調査した際には、結局紙にプリントされたEメールだけが史料として残った、という現実を目の当たりにした。公用のEメールについては、そのデータを個人だけではなく、組織体として保存しておくことが望ましい、ただ、それでは忌憚のない意見を書かなくなる危惧も生じるので、そう簡単な問題ではないだろう。

以上、ざっと史料論的見地から、所感を述べてみた。今回の資料調査では、学生の側からの資料（各種アンケート、「アゴラ」への投稿など）や、マスメディアに掲載された関係記事などについては、まったく調査できなかった。個人による作業では無理があることは当初から承知していたが、いささか残念でもある。

『南山大学百年史』に向けての史料調査は、より体系的・組織的に進めるべく、早期に史料調査専門の委員会を設置し、専門の調査員を雇用されることを切に望む（無理かな？ 永井英治委員長、頑張って！）。

終

## 南山学会のアイデンティティ

——南山大学の研究機関の足跡に触れて

奥田 太郎

『南山大学七十五年史』編纂にあたり、私は、自身の所属する研究所と南山学会についての執筆を担当した。どちらも自分にとって身近なものであり、この機会に改めて遺された史料群を手掛かりにしてその歴史を振り返ってみることで、日々の業務に取り紛れていると見失いがちな、組織や活動内容全体の輪郭に触れることができた。なかでも興味深かったのは、南山学会の歴史と、その底流にある南山学会のアイデンティティ問題であった。ここでは、そのことについて、未だ見ぬ百年史担当者に向けて、覚え書き的なことを書き留めておこう。

振り返ってみれば、『南山大学五十年史』では、南山学会について一応小さな節が立てられており、また、部局史の中でも断片的な言及はあったものの、十分詳細に語られていたとは言えず、それが詳細に語られるべき内実をもつのかどうかも判然としなかった。そもそも南山大学の教員にとって南山学会とは、着任とともに毎月の給与から数百円を天引きされる対象であり、投稿権を有する紀要の発行元（あるいは助成元）として意識されていればまだマシな方で、年に一回懇親会で酒食を嗜む機会を与えてくれるもの、としか認識していない者もいるかもしれない

い。かつてはともかく、各領域の専門学会が確立し、あまつさえ乱立する現状にあって、大学内学会の存在意義はこの大学においても顧慮されなくなってきた、とも言えよう。

比較的厚めのコミットメントをもって関わっていると自負する私にしても、南山学会がいつ頃どのように設立されたのかと聞かれても答えられず、『アカデミア』創刊号の表紙も見たことがなかったし、そういうことを伝えてくれる先達にも出会っていない。ましてや、『アカデミア』という名をもつ紀要が複数存在している一方で、『南山法学』や『南山経済研究』など、南山学会から出版されていないと思しき紀要も存在している、という一見奇妙な状態の秘密を知っているはずもなかった。今回、南山学会に関する執筆を担当することになり、まずは、こうした素朴な疑問の答えを探すことから始めたわけである。

南山学会に関する史料としては、(A)『アカデミア』など、刊行された紀要群、(B)南山学会理事会の会議資料群、(C)研究会・総会・シンポジウム等で配布された資料群、の三種類の存在が想定される。(A)は、南山大学図書館にすべて収蔵されており、(B)は一九七七年以降のものについては現用資料として教育企画・研究推進課(前、教育・研究支援事務室)に保管され、また、(B)の最初期のものと(C)の一部は、南山アーカイブズに保管されている、<sup>(2)</sup>ということが判明した。

今回、南山学会についての調査を通じて、南山学会とはそもそも何のための組織なのか、という積年の疑問に対する一定の回答が見えてきた。この問いをめぐって、語られるべきポイントは、(1)南山学会創設の狙い、(2)南山学会のアイデンティティをめぐる紆余曲折、(3)南山学会シンポジウムという器の意義、の三点である。

(1) 南山学会創設の狙い

南山学会創設の狙いが最も鮮明に読み取れるのは、一九五二年刊行の『アカデミア』創刊号においてアロイジウス・パツヘ<sup>3)</sup>が著した「創刊の辞」である。

わが南山大学が、ひとつの新たな大学として偏えに希念するところは、ただ一つ、速やかに真の意味における大学としての学問的地位を学界に確立することである。本学がその創立の当初から、終始一貫、この希念を失わないことは、既に創立第一年度に早くも、真の意味における研究所たる人類学研究所を設け、さらに、第二年度末に言語学研究所設立の第一歩として音声学実験室を設け、これに続く各種の研究機関の設置計画も確立している事実によって明らかである。このことは蓋し、かような科学的研究に対する明確な態度こそ、大学の真の品位を形成し維持するための缺くべからざる条件であるとの確信に基くのである。／＼然しながら他方において、科学的研究は常にあらゆる科学的領域に互り他の研究との関連を保つべきであり、ここに、当然、『研究発表』機関が要請せられる。これがあって初めて研究の成果は広く学界の共有財として現実の必要を充たすものとなり得るのである。かくて今日、学術雑誌たる本誌『アカデミア』がわが南山大学教授団の研究発表機関として公刊せられるにいたったのであるが、近い将来において更に各専攻部門に応じそれぞれの研究発表機関が創刊せられるであろう。(『アカデミア』第一巻・第一号、一九五二年、二頁・傍線は奥田による)

最初の傍線部で述べられていることこそが、南山学会の存在意義を最もストレートに表現したものであろう。こ

ここでは、科学研究が「学界の共有財」となるには、「他の研究との関連を保つ」ことが必要だと明確に主張されている。この構想は、同じ『アカデミア』創刊号の編集後記「南山学会について」において、当時の南山大学の状況を踏まえて具体的に示されている。

南山大学は昭和廿六年現在では文学部内に英語英文学、ドイツ語ドイツ文学、フランス語フランス文学、中国語中国文学、哲学、教育の各学科及び社会学科（法律、政治、経済、社会、人類民族、言語その他を含む）を擁し、学部、学科の増設を準備しており、自ら南山学会の機関誌「アカデミア」の内容は、これら諸学を総合包含することになる。従つて本誌第三号に予定している「人間研究」の特輯は、これら諸学それぞれの立場からする総合的な人間観によつて、本誌の特徴を発揮することであろう。（『アカデミア』第一巻・第一号、一九五二年、一九二頁）

昨今「総合知」が口にされる傾向にあるが、南山学会は、設立当初より、いわば「総合知」を志向する学術集団として構想されていたことがここに窺われる。<sup>4)</sup>

これに対して、一つ前の引用における二つ目の傍線部は、個別の専門分野に応じた専門的機関誌の刊行を予言するものである。バツへの言葉のトーンとしては、『アカデミア』での総合的な学知の発信と両輪を成すものとして、それぞれの専門的機関誌が構想されているように思われる。しかしながら、この構想の実現は、この時より二十五年の時を経て、南山学会のアイデンティティを揺るがす火種となった。

## (2) 南山学会のアイデンティティをめぐる紆余曲折

南山学会が現在出版費用を負担している学内紀要は、四つの種類の『アカデミア』の他に、『南山法学』、『南山経済研究』、『南山経営研究』、『南山神学』、『南山大学日本文化学科論集』（『南山国文論集』を継承したもの）がある。一見してわかりにくいのは、南山学会が刊行主体であるのは『アカデミア』のみであり、他の紀要はそれぞれの学会が刊行主体であって、南山学会がそこに出版費用の助成をしている、という形をとっていることである。さらにややこしいことに、刊行主体となっている諸学会は、南山学会内の系列と無関係ではないらしい。この謎に關わる経緯が今回の調査で少し判明したので、それを記しておきたい。

一九七七年、南山大学に法学部が設立されるとともに、南山学会法学系列も立ち上がり、そこに属する会員が『アカデミア』とは別の『南山法学』を刊行することとなった。翌年、一九七八年五月の総会において、専門研究の質に責任をもつという観点から、『南山法学』の出版責任を南山法学会としたうえで、南山学会からの出版助成を求め、という提案が、法学系列より出された。「近い将来において更に各専攻部門に応じそれぞれの研究発表機関が創刊せられる」というパツへの予言の内容がここで顕在化するわけである。

しかし、法学系列からのこの提案は、すぐには承認されなかった。一九七八年十月役員会議において、南山学会と系列の学会との位置づけについて議論が紛糾し、継続審議とされた。翌年、一九七九年十二月役員会議において、「南山学会のあり方について」という議題が審議され、一度は系列別の学会の立ち上げと、それを主体とする機関誌の刊行を認める方向で話は進んだが、一九八〇年三月役員会議で、人文・自然系列および文学・語学系列ではそこに属する会員の専門の多様性ゆえに系列別学会を立ち上げることは困難であるとして、その年の総会への提

出が見送られることとなった。その後、一九八〇年十月役員会議において、「各系列間の学問的性質の相違等の諸理由により、現行体制を継続することが困難な状態にある」との認識が改めて示され、『アカデミア』から独立した機関誌の刊行を認める方針が決定された。そして、一九八一年五月の総会にて、「各系列の独自性と便宜性を考慮する」として、系列からの申請に基づいて関連学会の定期刊行物への出版助成を行うことが決定された。これにより、一九八一年より『南山法学』と『南山国文論集』が助成対象となり、続いて一九八二年より『南山神学』、一九八六年より『南山経済研究』と『南山経営研究』が助成対象となった。

なお、一九八一年の南山学会総会の議事録には、次のような記録が遺されている。

立松常任理事より「南山学会会則」の改正について、次のような提案理由の説明が行なわれた。／現行会則の下では、「アカデミア」の刊行は南山学会が行なう事業とされているが、既に法学系列は別の名称で独自の編集方針による機関誌を発行しており、このような会則に抵触する現状を追認する必要があること。更に、この際、南山大学の規模の拡大に伴って、各系列の独自性と便宜性を考慮することも必要であり、現会則を改定して、各系列が独自の編集方針に基づいた機関誌を発行することを認めることが、発展的な解決策であると考えられること。そこで、現会則の第三条を改正し、第三号に「各系列に属する学会が行なう出版事業の助成」の規定を加え、現行の第三号は第四号とすべきである。／審議に入り、南山学会と各系列の関係をどのように認識すべきかについて議論が展開され、各系列は南山学会に直接的に従属する学会ではないことを確認し、提案の「各系列に属する学会」という表現が不明瞭であるとして、新たな提案がなされた。すなわち、第三号は、「アカデミア」の名称以外の機関誌を発行する系列の名称を具体的に列挙することとし、当面は「経済・経営学会

および法学会が行なう出版事業の助成」とすることで意見の一致を見た。なお、現在既に発行されている「南山国文論集」に対する出版助成については、現行の第三号で処理が可能であることを確認した。

この議事録上の記述からは、一筋縄では進まない当時の状況が偲ばれる。パッへの掲げた「諸学の総合包含」や「学界の共有財」をもたらず「機関」としての『アカデミア』からの路線変更に接して、専門分化路線と総合知路線の間で揺れる南山学会のアイデンティティをめぐって穏やかならぬ論争が展開されていたのだろう。

### (3) 南山学会シンポジウムという器の意義

『アカデミア』刊行に並んで、南山学会の重要な活動として、南山学会シンポジウムがある。この南山学会シンポジウムを考えるうえで、参照しておくべきものとして、一九七〇年刊行の『アカデミア』南山大学創立二十周年記念号に寄せられた沼澤喜市の緒言がある。

本学の研究紀要に『アカデミア』の名称が冠せられているのは、純粹にして自由な学問研究への熱望を反映するものである。制度としての大学が今後どのように変ってゆこうとも、アカデミックな研究が大学の生命であり、存在理由であることには変りはないであろう。さいきん教育機関としての大学の意義が強調されるようになっていくが、大学における教育——職業教育や人格形成も含めて——は、どこまでも真の意味でアカデミックな研究によって支えられていなければならないのである。（「大学創立二十周年記念号によせて」『アカデミ

この緒言が書かれたのは半世紀前のことだが、仮にそのことを伏せて最近書かれたものだと言われても誰もそれを疑わないのではないかと思わせるほどに、この緒言が示した問題意識は現在に至るも共有されている。それはさておき、興味深いのは、南山学会シンポジウムが、共通テーマのもと毎年開催されるという現在のようない形態になったのは、残存する資料を確認する限り、一九七三年以降、つまり、上記の沼澤の緒言のメッセージの後だということである。詳細については、『南山大学七十五年史』に歴代テーマ一覧を掲載したのでそちらを参照されたいが、南山学会シンポジウムでは、当初から、沼澤の言うような「アカデミックな研究」路線と、「教育機関としての大学の意義」路線が拮抗しており、やがて一九八〇年代後半に差し掛かると、後者の路線が大勢を占めるに至る。以後、南山学会シンポジウムという器は、パッヘや沼澤が掲げた「アカデミックな研究」における「総合知」が現出する場とはやや離れた用途で用いられ続けていくことになる。

こうして、南山学会のアイデンティティは、一方では、『アカデミア』からの独立志向に見られる専門分化と、他方では、南山学会シンポジウムのテーマ傾向に見られるファカルティ・ディベロップメント化とに引き裂かれながら、「総合知」現出の場から遠ざかっていく。この経緯と、それを経て現在直面する事態は、南山学会のアイデンティティ論にとどまらず、多様な専門分野の担い手から成る集団としての大学において研究をするとはいかなることか、という大学論一般にまで波及する争点を構成する。

今後、南山大学創立百年に向けて、パッヘや沼澤が構想した「総合知」現出の場としての南山学会のアイデンティティを再構築するのかが、改めて問われる四半世紀となるだろう。『南山大学七十五年史』編纂の一翼を担

うべく、遺された史料に触れたことで、図らずもそうした課題を改めて突きつけられることになった。

註

- (1) 『南山学会理事会議事録（一九七七～一九九八年度）』、および、それ以降の二〇二一年度までの議事録が保管されている。古い資料としてはこれらの他に、『南山学会関連書類（昭和四〇～四五年度）』、『南山学会会員業績活動（一九六九～一九八四）』、『南山学会総会（一九八八～一九九三年度）』、『南山学会総会（一九九四年度～二〇〇一年度）』【表記ママ】などが保管されている。（二〇二二年四月九日確認）
- (2) 予備室G-1「南山学会 昭和二十年」というボックスのなかに、昭和二十年代、昭和三十年代、昭和四十年代、昭和五十年代の資料が断片的に遺されている。
- (3) 南山大学初代学長バツへのファーストネームには様々な表記が存在するが、ここでは、『アカデミア』に記載された表記を用いている。
- (4) もちろん、当初寄せ集めの構成でスタートせざるを得なかった状況を糊塗するための強弁だった、という厳しい見方もありえようが、大学創設間もない時期にあって、それに尽きないものが多少なりともあったと考える方がむしろ現実的であろう。
- (5) これ以降の記述は、『南山学会理事会議事録（一九七七～一九九八年度）』の該当史料に依拠している。
- (6) この予兆は、一九七五年にあった。創刊以来、一つの『アカデミア』の中で各系列の担当号が持ち回りで刊行される形態をとっていたが、この年より、文学・語学編、人文・自然科学編・保健体育編、経済・経営学編の三つの『アカデミア』に分かれてそれぞれ並行して刊行する形態に移行している。学部増設を重ねる南山大学の巨大化に伴って、南山学会内での専門分化への要望が強まるなか、この流れに決定打を加えたのが法学系列からの提案だったということであろう。



## 理工学部データサイエンス学科での「都市のOR」研究の歴史

鈴木敦夫

「都市のOR」は、データサイエンス学科のオペレーションズ・リサーチの研究グループの共通する研究テーマである。この研究テーマは、オペレーションズ・リサーチと都市計画との学際分野であり、オペレーションズ・リサーチには具体的な問題を、都市計画には数理的な手法を提供して相互に発展してきた。南山大学七十五年史ではその一部を紹介したが、本稿ではより詳しく「都市のOR」研究の中心である、「都市のOR」ワークショップについて紹介する。

二〇〇〇年度に数理情報学部が瀬戸キャンパスに設置されて、南山大学に伏見正則教授が東京大学から赴任された。それ以前から、日本オペレーションズ・リサーチ学会の「都市のOR」研究会では、都市が直面している諸問題をオペレーションズ・リサーチの手法を用いて解決する研究を行っていた。毎年八月に筑波大学で、腰塚武志教授（後に南山大学に赴任される）、伏見正則教授、中央大学の田口東教授、政策研究大学院大学の大山達雄教授らが中心となって研究会が開催されていた。二〇〇〇年度に伏見教授が南山大学に赴任されたのをきっかけに、南山大学で毎年秋から冬にかけて「都市のOR」ワークショップを開催しようということになり、伏見教授を中心と

してワークショップを開催した。これが現在まで南山大学で毎年開催されている「都市のOR」ワークショップの起源である。それ以来「都市のOR」の研究会は、夏に筑波大学で「都市のOR」サマーセミナー、秋か冬に「都市のOR」ワークショップを開催することになった。

二〇〇〇年度の「都市のOR」ワークショップは、十一月二十四日（金）、二十五日（土）の二日間にわたって開催された。発表件数は七件、一件当たりの発表時間は五〇分で、発表に対する議論の時間が十分とれる余裕のある研究会だった。この第一回のワークショップのプログラムは以下のようなようだった。

都市のORワークショップ二〇〇〇年

日時…一月二四日（金） 一三…三〇―一七…二〇、懇親会 一八…〇〇―二〇…〇〇

一月二五日（土） 九…三〇―一二…三〇

場所…南山大学瀬戸キャンパス

千四八九―〇八六三瀬戸市せいれい町二七

プログラム…

二四日（金）座長 伏見正則（南山大学）

一三…三〇―一四…二〇 安西保幸、田口東（中央大学）

「地下鉄大手町駅構内の歩行者シミュレーション」

一四…三〇―一五…二〇 李明哲（福岡大学）

「円形都市の平均移動距離解析」

一五・三〇一六・二〇 腰塚武志（筑波大学）

「移動から見た都市空間の分析（その後の成果）」

一六・三〇一七・二〇 田口東（中央大学）

「大規模な建物における居住面積と交通路面積の配分」

二五（土） 座長 澤木勝茂（南山大学）

九・四〇一〇・三〇 赤澤武雄、鈴木敦夫（南山大学）

「名古屋市の救急車の最適配備」

一〇・四〇一〇・三〇 三浦英俊（明海大学）

「道路の交通容量と本数に着目した道路網評価」

一一・四〇一〇・三〇 鈴木勉（筑波大学）

「少子化と公共施設配置」

二〇〇一年二月一日（土）、二日（日）に開催された二〇〇一度年のワークショップでは、二二件の発表があった。

この年から経営研究センターとの共催行事となり、研究発表をする大学院生に対して経営研究センターからの援助金で旅費の補助を行ったことが、発表件数が大幅に増加したことに寄与している。実際他大学を含めて二二人の大学院生が研究発表を行い、そのうち四名が現在研究者として活躍している。二〇〇二年度は発表件数一五件と少し落ち着いたが、二〇〇三年度には、大学からの数理情報学部完成年度の研究援助も受け、International Workshop on

Urban Operations Research という国際ワークショップを二月二七日（木）から二九日（土）まで南山大学瀬戸キャン



写真1 南山大学瀬戸キャンパスで開催されたInternational Workshop on Urban Operations Research (IWUOR) の集合写真

ンパスで開催した。海外から六名の研究者を招へいし、国内の研究者と合わせて二〇件の研究発表を行った。海外から招へいした研究者とは、現在でも交流があり、国際会議等で情報交換をしている。写真1は瀬戸キャンパスのクリスマス馬小屋の前で撮影したワークショップの集合写真である。

二〇〇五年度は愛知万博が開催されたので、通常の開催時期を筑波大学と交換し、夏に南山大学「都市のOR」ワークショップを、冬に筑波大学でのセミナーを行った。二〇〇五年度以降も、科学研究費などを利用して毎年二名から三名の海外の研究者を招へいしている。二〇〇六年度以降は、おおむね二五件程度の発表件数、七〇名程度の参加者が続いた。二〇〇四年度、二〇〇六年度、二〇〇七年度は南山大学高岳サテライトキャンパスで開催した。写真2は二〇〇七年度のワークショップの集合写真である。

二〇〇八年度から二〇一一年度は、二〇〇七年度に採択された文部科学省オープンリサーチセンター整備事業



写真2 南山大学サテライトキャンパスで開催された2007年度「都市のOR」ワークショップの集合写真

「都市の持続可能な繁栄のためのインフラストラクチャ」の最適運用計画の策定と普及」の事業の一環として「都市のOR」ワークショップを開催した。この間、海外から招へいする研究者を三名程度にし、日本人研究者の発表の半分程度は英語での発表として、より国際的なワークショップに移行していくことになる。

二〇一二年度には、「都市のOR」ワークショップを母体として、ISOLDE XII (International Symposium on Location Decision) を七月一九日から二四日まで南山大学とグランビアホテル京都を会場として開催した。このシンポジウムは、最適配置問題の分野の研究者が集う国際シンポジウムで、三年に一回開催されている。従来は、北米とヨーロッパで交互に開催されていたが、初めて日本で開催されることになった。本来は二〇一一年度の開催の予定であったが、東日本大震災の影響で二〇一二年に一年延期して開催した。このシンポジウムには海外から多くの参加者があり、国内外の研究者の交流の場となった。このシンポジウムをきっかけに多くの日本人の



写真3 京都グランビアホテルで撮影したISOLDE XIIの集合写真

研究者の研究内容が国際的に知られるようになり、その後の共同研究などにつながっている。写真3はグランビアホテル京都で撮影した参加者の集合写真である。

二〇一二年度以降も「都市のOR」ワークショップは継続して行われた。会場は南山大学名古屋キャンパスとなり、毎年八〇名程度の参加者を集めるようになっていった。特に二〇一四年度以降は、発表件数が多くなり、パラレルセッションを組まざるを得なくなった。その二〇一四年度のワークショップでは三八件の発表があった。二〇〇〇年度には七件だった発表件数が一五年で五倍以上になったことになる。その理由の一つは「都市のOR」の初期に研究発表を行った大学院生が、大学に職を得て研究者となり、今度は自分たちが指導する大学院生に「都市のOR」ワークショップで研究発表をさせるといような循環が生まれていることがある。

二〇一九年度には、IWUOR (International Workshop on Urban Operations Research) 2019として、国際ワークショップを開催した。このワークショップには、北米、ヨーロッパ、アジアから約五〇名の参加者があり、三日間にわたって、集中的



写真4 S棟前で撮影したIWUOR2019の集合写真

に研究発表と情報交換を行った。このワークショップでは、南山大学からの学会開催援助費によって、インドやハンガリーからの大学院生への旅費の補助を行った。写真4は、S棟前の広場で撮影した集合写真である。

二〇二〇年度以降は、開催時期が例外的に変則になり、また、新型コロナウイルスの感染が拡がって、対面での研究会の開催が困難になったこともあり、南山大学での「都市のOR」研究部会は開催されていない。それに代わって、二〇二一年度は十一月に日本オペレーションズ・リサーチ学会の行事であるRAMPシンポジウムが三浦英俊教授を執行委員長としてリモートで開催される。その中で「都市のOR」のセッションが設けられ、「都市のOR」のメンバーが研究成果を発表する。今後も、研究者の世代交代もあり、開催場所や形は変わっていくかもしれないが、「都市のOR」の研究はデータサイエンス学科のオペレーションズ・リサーチの研究者の主要なテーマとして継続されていくことを見守ってきたい。



## 経営学部のゼミ活動と産学連携

安藤 史江・川北 眞紀子・中島 裕喜

はじめに

経営学部では七名の教員が『七十五年史』の執筆に参加し、大学院やビジネススクールを含む各項目について、二〇〇〇年以降の来歴や諸活動に関する情報を収集した。その一つである「ゼミ活動と産学連携」では、経営学部の教員が過去に演習指導において取り組んだ様々な企業との産学連携プログラムを把握可能な限りリストアップし、それらが経営学部の教育活動の特徴づける重要なものであったことを指摘した。しかしながら、紙幅の都合からプログラム名が列挙されるに留まっておき、個別の取り組みについて詳しく掘り下げて記載できなかつたことが惜まれる。このたび本稿執筆の機会を与えられたので、『七十五年史』の内容を少しでも補うべく、経営学部教員の演習指導における産学連携活動の一端を紹介したい。

## 一・歴史的知見を活かしたビジネス提案

中島裕喜ゼミでは二〇一七年度と二〇一八年度に名古屋銀行が主催する企画体験型プログラムに参加した。ここでは二〇一七年度の活動について紹介したい。四月中旬に名古屋銀行の担当者からプログラムの説明を受け、同行の店舗で口座開設を促すためのサービスや商品を提案することになった。中島ゼミが学ぶ専門分野は「経営史」という歴史系科目であり、本来は現業のビジネスやサービスの開発と必ずしも密接に関わるものではない。自らの知見をどのように活かせばよいのか、また学生をどのようにすれば導くことができるのか、ということが直ちには分からず非常に不安だったことを覚えている。

そこでまずは同行の歴史を紐解くことから手がかりを得ようと思い立ち、『名古屋銀行50年史』を入手してゼミ生と輪読することにした。同行は無尽会社として終戦直後に発足し、地元の中小・零細企業と関係を深めながら歩んできた歴史を持つため、こうしたところから同行の競争優位の源泉があるのではないかと話し合った。一方、ゼミでは複数の課題をこなす必要があったことから五名を選抜してチームを編成し、実地調査に乗り出した。休日等を利用して店舗を巡ると、やや入店しづらい雰囲気があり、若者にとって身近な存在ではないことがわかった。また学内でアンケートを実施し、地元への就職希望者が多いにもかかわらず、多くの無名の中小企業は情報が乏しいため就職に二の足を踏んでいること、そして「就職情報サイトにはない情報を銀行の店舗で入手できれば訪れる」と回答した学生が全体の七五%に達したことを確認した。

こうした分析の結果、学生は「Nagoya Bank Card」というビジネスモデルを考案した。簡単に説明すると、名古屋市内全域に展開する同行の各店舗が融資審査などのプロセスを通して選出した地元の優良企業の情報をカードに

まとめて店舗に置き、学生は口座開設を条件にそのカードを入手し、銀行からの紹介を通じて企業訪問をすることができる。求人難だが広告宣伝費を負担できない優良な零細企業と地元志向の学生をマッチングし、それを仲介する銀行にとつては学生の口座開設とその生涯にわたる継続的利用というメリットが生まれる。こうして地元経済の活性化に貢献するという内容だった。

企画提案は秋の発表会で愛知県下の五つの大学が競うコンペティション形式で行われた。頭取をはじめ居並ぶ重役の前で学生の声は明らかに震えていたが、時間をかけて作成したプレゼン資料を用いながら理路整然と説明する姿に彼らの成長の跡が見えた気がした。また私自身、教員として学ぶことが多かった。後日、発表チームの学生と慰労会で焼き肉を食べに行き、山崎川を散策して夜桜を楽しんだのは懐かしい思い出である。

## 二・組織の現場を「感じる」試み

安藤史江ゼミでは、二〇一九年度から三年連続で社会保険労務士法人名南経営に全面的にご協力いただき、産学連携プロジェクトを運営している。安藤ゼミで理解を深めていく専門科目は「経営組織論」や「人的資源管理」である。こうした組織や人材のマネジメントは、多くの企業にとつて比較的センシティブなテーマと位置付けられる。そのため、学生が産学連携を希望しても、それが叶わない時期が長く続いていた。それが、人事系のコンサルティングをビジネスとしている名南経営と出会い、社員の方々にご協力いただけることになったことで、学生にとつては非常にありがたい機会を得ることができた。

毎年多少の多寡はあるが、五名前後で一つのチームを作り、チームごとに異なるテーマを追究する。二〇二一年

度は「入社後の人材のミスマッチをなくす」「労働時間の削減で多様な人材の活躍を促す」「テレワークで生じる新入社員の社会化のつまづきを解決する」という三つの研究テーマを掲げている。名南経営の社員の方が一人ずつ、各チームの担当者として併走して、名南経営のクライアント企業の方々にとっても実務上、興味を持っていただける提言となるよう、支援や助言をいただきながら進めている。

根拠なき提言にならないよう、ヒアリング調査や質問票調査、ときには実験なども重ねながら行う活動は、試行錯誤の連続であり、その過程では生みの苦しさも少なくない。しかし、だからこそ、最終報告会でお世話になった名南経営の方々はもちろん、その場に招待されたクライアント企業の方々から、面白い、自社でも取り入れてみたい、などと褒めていただけたときの嬉しさは、何物にも代えがたい、かけがえない体験であり、学生たちのその後の自信にもつながっているようである。

産学連携プロジェクトの準備はそれなりに手間や時間はかかるが、こうした学生たちの成長を間近で見られることが、教員としての継続の動機付けとなっている。

### 三．リアル商品開発と理論的考察の行き来

川北真紀子ゼミでは、三年の春学期には企業への自主企画提案を行っており、秋学期には様々なコンテストに出場している。春学期の自主企画の場合、相手企業の課題をヒアリングし、その課題に対して調査を行い課題解決に向けた提案を行うという形をとっている。マーケティングリサーチの結果を提案することもあれば、それだけでなく、実施企画案までを提案し、企画を実現することもある。店舗での消費者ヒアリング、競合調査、農園での取材、

販促企画やSNSアカウント運営、印刷物制作、パッケージ制作、試作品製造とテスト販売と、経営者と接しながら現場で地道に汗をかいている。

二〇一四年度から参加しているSカレ (Student Innovation Collage) という商品開発コンテストでは、三〜四名が一チームとなり、実際の商品化権をかけた企業に対して商品開発アイデアを提案する。現在まで、いくつものチームが企業とのリアル商品開発の権利を獲得し、企業とともに商品を発売した。株式会社ディーエイチシーとの「かる肩クッショントート (二〇一七年度)」、フランスベッド株式会社「りゅっくしょん (二〇一八年度)」の二商品では総合優勝、株式会社美販「ぺっちゃんこ虫かご (二〇一九年度)」は総合準優勝を獲得している。

「りゅっくしょん」の商品化に際しては、自分たちのニーズからヒントを得て、リュックを軽く運ぶためのクッションを開発した。数多くの女子学生の荷物調査やヒアリング、デザイン案の選好調査、実際の商品を背負ってもらう調査といった丁寧なリサーチに始まり、本当に軽く感じるのかということを検証するために、人間工学の研究室と行った検証調査、さらには扱ってもらう店舗を開拓するために営業活動を行い、東急ハンズでの取り扱いに成功した。メディア・リレーション活動ではテレビ局や新聞社にアプローチし、新聞での報道、テレビ局の報道も獲得した。なお「りゅっくしょん」の宣伝写真が『七十五年史』の部局史第四章 (経営学部) に掲載されているのでご覧いただきたい。

産学連携では、学生たち自身にやりたいことを設定してもらうことにより、学生たちが動機づけられ、楽しく取り組んでいるようである。プロジェクトでの調査には、消費者行動の概念を使った分析が必要であり、開発コンセプト作成では、どのようにポジショニングするかといった知識が必要となる。つまり、理論的な面での理解と、現場での制約や困難の間を歩き来という学びが実現できていると言えるだろう。教員としては、学生たちの消費者行

動を垣間見ることができ、さらには新たな発想まで教えてもらえる。また、ビジネスの現場での悩みを経営者から大きくともできる。教員も理論と現場の往來の機会をもらっている。

### おわりに

以上、経営学部の教員が取り組んでいる産学連携のゼミ活動について記した。経営学部が歩んできた歴史は必ずしも順風満帆なものではないかもしれないが、そのなかで多くの教員が研究や演習指導を通して産学連携に積極的に取り組み、地元を中心とする産業や経済の発展に少なからず貢献してきたことは誇るべきことではないかと感じている。

本稿で紹介した各教員のエピソードは日常的な教育活動の簡潔な叙述に過ぎないが、それゆえに年月が経てば公式文書からは決して窺い知ることができないのもちろんのこと、当の教員ですらも記憶の彼方に忘却してしまう過去の出来事でもある。大学や学部のアイデンティティーを教員と学生が共有することが強く求められている現在、我々が振り返るべき過去とは、むしろこうした「ありふれた授業風景」であり、その記憶を意図的に記録していくことが教育現場において求められているのではないだろうか。本稿はそのささやかな試みであるが、『七十五年史』編纂・執筆に参加させて頂くことを通して、こうした気付きを得る貴重な機会を与えられたことを感謝したい。

## 南山大学史の始点

永井英治

### はじめに

『南山大学七十五年史』は、本来であれば二〇二一年九月の開学記念式典にあわせて刊行されるはずであった。刊行が遅れたのは、二〇二〇年度初頭のコロナウイルス感染症対策が優先され、編纂を担当する委員会の設置が遅れたためである。このこと自体、記録にとどめられるべきであるし、さらにこの事実から、『南山大学七十五年史』はわずか一年半ほどで編纂を完了する予定であったこともわかる。これは、新制大学創立五十年を期して編纂された多くの大学史の成果をほぼ棚上げするものであった。それでも、七十五年史を作っておかなければ忘れ去られてしまう事実を残すという目的には意義が認められ、『南山大学五十年史』<sup>〔1〕</sup>以後の二十五年度の記述に重点を置く方針が確認されたのである。

『南山大学七十五年史』が二〇二一年九月に刊行される予定であったことは、南山大学史の始点が一九四九年に置かれていないことを意味する。これが本書編纂のもうひとつの特徴である。

南山大学は一九四九年四月に新制大学として発足した。『南山大学五十年史』はこのことを念頭において編纂された。しかし、『南山大学五十年史』の隣に並ぶはずの『南山大学七十五年史』は一九四六年を始点とする。七十五年史編纂の過程では、五十年史を継承することが意識され、より具体的には、装丁において『南山大学七十五年史』は『南山大学五十年史』をかなり意識して選定された。二冊が並んだ様子が装丁を考える大きな前提として意識されたのである。しかし、刊行の暁には対になるかのように並ぶ二冊の間で、南山大学史の始点が異なるというのは異例であるといつてよいであろう。本稿の目的は、この異例な編纂方針の転換を解説することにある。

## 南山大学史

『南山大学五十年史』は、南山大学で初めて刊行された年史である。一九九九年の開学五〇周年を期して編纂された『南山大学五十年史』は、新制大学五〇周年を契機として編纂された他の大学史と同じように、新制大学としての起点をもって自校史の始点としている。これは学長序文に記された通りであり、『南山大学五十年史』の枠組みは新制大学史として構成されている。

しかし本文の叙述では、前身校である名古屋外国語専門学校（一九四七年に南山外国語専門学校から改称される）の歴史が南山大学史の叙述の中に組み込まれている。これは年史の構成上の問題ではなく、前身校の存在そのものが南山大学の階梯の始点に置かれているのである。

この理由は、南山中学校（旧制）の創設者であるヨゼフ・ライネルスから後事を託されたアロイス・パツへの意図として叙述されている。パツへは名古屋外国語専門学校を設置の段階から「大学」の前身と位置付けたのであり、

それはパツヘが田中耕太郎と会談したときの様子から如実にかがうことができる。

田中耕太郎はカトリック関係者の間では著名な教育学研究者であり、『日本カトリック新聞』『カトリック新聞』にもその名が散見される。戦後は文部大臣・参議院議員を歴任しており、カトリック関係者が学校設置について相談するに相応しい人物であった。

田中耕太郎との会談では、はじめ、パツヘは高等学校（旧制）の設置を考えていた。まずは南山中学校（旧制）の卒業生の進学先を考えていたのである。しかし、高等学校設置がほぼ無理なことを知らされ、かわりに外国語専門学校設置を勧められたことから、パツヘの意志は変わっていった。別稿<sup>②</sup>で論じたように、戦後の教育界には外国語専門学校を貿易などの要地に全国的に配置する政策がうかがえ、名古屋では南山学園がその任を担うよう、パツヘは田中耕太郎から誘導されたのである。

田中の誘導にパツヘは応えた。パツヘの方針転換があっさりと進められたことに、パツヘの意図が高等学校（旧制）の設置ではなく、高等教育機関の設置であったことがうかがえるのである。旧学制では、高等学校（旧制）——大学（旧制）のラインとともに専門学校という選択肢があり、これを階梯に高等教育機関の改編を迎えるパツヘの構想が立ち上げられたのであろう。

このように、設置者自身の意図が、名古屋外国語専門学校においては来るべき学制改革の礎であったことが『南山大学五十年史』の本文叙述の基本方針であった。南山外国語専門学校開学の初年度に設置されたのは英語科と華語（中国語）科であったのは、外国語専門学校の基本に做った実用言語重視の姿勢の現れであるが、次年度から独語科と仏語科を増設したのは、外国語専門学校の後のことを考慮したものであったと考えられる。

以上のように、『南山大学五十年史』は叙述では前身校の歴史を大学史に組み込みながら、新制大学として発足

した自校史の枠組みを重視するものであった。

『南山大学七十五年史』は、はじめに述べたように極めて短期間のうちに編纂された大学史である。そのため、『南山大学五十年史』で扱ったことは同書を利用し、同書以後のことに重点を置いた。したがって、叙述において前身校の位置付けには『南山大学五十年史』と『南山大学七十五年史』との間に方針の転換はない。さらに、枠組み自体においても、始点を一九四六年の南山外国語専門学校の開学に置き、叙述との整合性を高めている。

『南山大学七十五年史』の始点を変更した理由は、高等教育機関としての連続性と同窓会の連続性である<sup>3)</sup>。同窓会についていえば、前身校の同窓会を本校に組み込むことは珍しいことではない。さらに、南山大学では毎年開学記念式典が行なわれているが、その開催年数が一九四六年を起点として数えられている。

高等教育機関としての連続性については、前身校を組み込むというより、名古屋外国語専門学校と南山大学をみる立場の問題である。このことを南山学園史の叙述から考えよう。

### 南山学園史の中の南山大学史

学校法人南山学園からは、これまで二冊の南山学園史が刊行されている。はじめの『南山学園の歩み』<sup>4)</sup>は判型も小さな冊子であり、その叙述では、南山学園の設置母体である神言修道会の日本上陸からその後、南山中学校(旧制)と南山小学校(旧制)の設置とアジア太平洋戦争、南山外国語専門学校の設置、南山大学の設置が扱われている。

特徴的なことは、叙述の対象が時間の進行とともに南山中学校(旧制)↓名古屋外国語専門学校↓南山大学へと移っており、その時々々の主な関心となっていることである。言い換えれば、戦後の叙述においては中等教育段階が

ほぼ論じられていないことを意味する。コンパクトな年史叙述の制約が働いたものと考えられよう。この叙述では、名古屋外国語専門学校は南山大学の前史とは位置付けられず、独自の地位を保っている。南山学園史としてみたとき、学園を構成する中等教育・高等教育それぞれについての歴史が叙述されてよいであろうが、本書の造本がそれを不可能にし、代わって、その時々々の旗艦に位置付けられる学校について叙述したのである。本書においては、南山学園史は単線的な歴史として描かれている。

『HOMINIS DIGNITATI 南山学園創立75周年記念誌』は、名称こそ記念誌であるが、南山学園と南山学園を構成する学校の沿革史では浩瀚な書物といえる。本書では、学校法人南山学園が経営する学校の歴史がそれぞれ扱われているのであるが、名古屋外国語専門学校と南山大学の歴史は章立ての上で連続するものとされている。本書がこのような構成となった目次案を提案したのは実は私で、それに対して川崎勝勝編纂副委員長からは当然のごとく質問がなされた。私は南山大学の設置を画期とするのは当然の発想であるが、南山学園においては、南山外国語専門学校が設置されたことがその後の歴史を強く規定していると答え、その目次案が採用された。

『HOMINIS DIGNITATI 南山学園創立75周年記念誌』では、高等教育機関としての南山外国語専門学校の設置が重視され、南山大学はその後に連続するものと位置付けられたのである。ただ、私の意図としては、南山大学の設置が重視されるのは当然なので、戦後の南山学園における学校再編の起点でもある、旧学制下で行なわれた南山外国語専門学校の設置を強調すべきと考えたのであった。この発想は『南山大学七十五年史』の構成にも採用されたということが出来るが、私の意図は南山学園全体の戦後改革の起点でもあるということにあった。

南山学園史という枠組みを除けば、『HOMINIS DIGNITATI 南山学園創立75周年記念誌』の枠組みと構成は、『南山大学七十五年史』に継承されたことになる。ただし、南山大学史という枠組みが南山学園史の中の高等教育機関

の歴史という枠組みと一致すべきか、今後も検討が必要であろう。

### むすびかえて

最後に南山大学の中で、編纂作業が始まったものの遂に完成することなく終わった南山大学二十五年史での枠組みと構成を考えてみたい。

現在残されている資料に神言修道会についての原稿（原稿）があることから、南山大学二十五年史でも名古屋外国語専門学校についての記述は準備されたと考えられる。しかし、目次案などは残されていないため、果たして名古屋外国語専門学校の位置付けはどのようなものであったかは不明である。枠組みについては、一九七四年を期して編纂事業が始まり、残された「年表」からはやはり一九四九年を始点としていたようである。

この年表は記念品として配付されたアルバムの冒頭に挟まれていたらしく、一九四九年以前の記述はまったくない。一九四九年にも一九四六年にも在籍していたであろう教職員は少なからずいたであろうから、どちらも生々しい現代史であったかもしれない。ただし、南山大学は一九六四年に現在の地に移転しており、一九七四年はちょうどその一〇年後である。南山大学が移転した後、もと大学があった五軒家町は南山学園の拠点と位置付けられ、大学講堂は学園講堂となった。大学と学園を区別する発想が強くなるにつれ、南山大学史と南山学園史を区別することが普通となって、このような年表が作成されたのかもしれない。

註

- (1) 二〇〇一年、南山大学。
- (2) 永井英治「戦後設置の専門学校の歴史的意義―外国語専門学校の「遺産」―」『アカデミア』人文・社会科学編第八二号、二〇〇六年一月。
- (3) これは総務担当副学長から永井に伝えられた理由である。
- (4) 一九六四年、南山学園。
- (5) 二〇〇七年、南山学園。
- (6) 南山アーカイブズ所蔵。



## 自校史を知るための他大学アーカイブズの活用

―南山大学学外オリエンテーションを例に―

林 順子

はじめに―『七十五年史』経済学部・経済学専攻編集にあたり―

今回『南山大学七十五年史』を編纂するにあたり、筆者が担当した経済学部、社会科学研究科経済学専攻については、計七名のかたにも分担執筆を依頼した。この中には、経済学部を御退職された荒井好和先生、近藤仁先生も含まれている。また、経済学部在任中に大学アーカイブズの設立にも貢献された川崎勝先生にも、オブザーバーとしてご意見をいただいた。現職、御退職の先生がたとも、ご多忙の中快くご協力いただき、心より御礼申し上げます。さて、筆者は学部の学生生活の項の執筆を担当することとなったが、本稿ではその過程で判明した上智大学と南山大学の学外オリの関連と相違について、紹介したい。

## 南山大学全学的学外オリと経済学部学外オリ

経済学部生にとって大きな行事の一つに、入学式の翌日に新入生に対して実施する学外オリエンテーション（通称学外オリ）があるが、これは、一九八二年度に始まり二〇一六年に終わりを迎えた。今回の『七十五年史』でも取り上げるべきこの行事について、執筆分担者の打ち合わせ（コロナ禍の下zoomで開催）の場で近藤先生より、以前、学外オリが二ヶ所に分散して実施された時期があるとのこと教示をいただいた。

学外オリの目的は、新入生にこれから所属する大学、特に学部の特性やカリキュラムの理解を促し、かつ、初対面の教員や同級生との親睦を図り、大学の一員としてのスタートをスムーズに切れるよう導くところにある。同級生との交流という点からすると、新入生を分散させるのは得策ではない。なぜ二ヶ所分散ということになったのか。筆者は、『七十五年史』執筆のために経済学部長室で教授会記録などを繰りながら、学外オリの記事も遡って調査した。さらに南山アーカイブズにも足を運び、評議会記録をはじめ学外オリの名が付されたファイルなども閲覧させてもらった。結果、本大学にて全学的に実施された一九六九―七一年の学外オリにおいては、当時あった四学部が二学部ずつ一日ずらして実施していたこと、行き先も二ヶ所設定して二学部が分かれて行動していたこと、さらに、行き先によっては一学部全員が泊まれる大施設がなく、新入生が複数の旅館に分散して宿泊したときも、確かにあったことがわかった。さらに、全学的学外オリの廃止から十数年を経て経済学部独自の学外オリが開始される経緯もおよそ判明した。詳細は拙稿「1969-71年度における南山大学学外オリエンテーション―経済学部1982年度学外オリへの連続性―」『南山経済研究』第三六巻一号を参照されたい。

## 一九六六年度上智大学オリエンテーション・キャンプ報告書

先記の拙稿では、南山大学の一九六九年度から七一年度の全学的オリが、上智大学のオリエンテーション・キャンプ（以下、オリキャンと略す）を強く意識するものであったことを明らかにした。上智大学のオリキャンは一九六六年度に始まるが、どういう経緯かそこに参加した南山大生がぜひとも本大学でもと望んだのが、南山での学外オリ立ち上げのきっかけであった（一九七〇年七月七日評議会記録）。また、当時の評議会記録には、上智大におけるオリキャンの意義や運営方法をもとに、本学における効果などを考える会議録が残っており、その会議資料とみられる、上智大の学外オリの初実施の様子をまとめた『昭和41年度新入生オリエンテーションキャンプ報告書』（以下、上智大『報告書』）も、南山アーカイブズの学外オリエンテーションファイルに他の学外オリ関連資料と共に一括保存されている。

本稿では、拙稿では触れなかった、この上智大『報告書』についてももう少し紹介したい。A4版、全二四ページにわたる本報告書の構成は以下の通りである。

「新入生オリエンテーションキャンプの実施にあたって」、「実施要領」、「41年度新入生歓迎オリエンテーション日程表」、「プログラム」、「昭和41年度新入生オリエンテーション合宿・運営・管理報告とその反省」、「オリエンテーション合宿の目的とその反省」、「実施経過とその反省」、「宿泊管理とその反省」、「運輸管理とその反省」、「日程とその反省（現地本部）（クラス）（在京本部）」、「準備したもの」、「合宿に対する感想（全新生）」、「第一回新入生キャンプをみて」

執筆には、学生部五名のほか、補助にあたった各学部の学生四名が加わっており、準備段階から含めて詳細な経

緯と反省点が多角的につづられている。大学の規模や歴史は違えども、これから学外オリを実施しようとする南山大において、この『報告書』は、非常に参考にできる内容のものであった。

### 上智大オリキャンの前身（一）

それではなぜ、上智大はオリキャンを始めたのであろうか。

上智大『報告書』によると、オリキャンの原型となるものは戦前に見られ始めている。すなわち、同大では、戦前において入学時に新入生、教職員、在校生等全大学構成員によって「合宿」がおこなわれ、上智の「独特な雰囲気」をつくり出していた、と『報告書』は紹介する。戦前の同大におけるこの「独特な雰囲気」については、上智大学史資料集編纂委員会編『上智大学史資料集』補遺（一九〇三〜一九六九）所収、大学総長が文部省へ一九三八年六月十一日付けで提出した、同一九三七年九月から翌年二月までの「国民精神総動員実施二閲スル報告書」に、垣間見える。日中戦争が勃発し、教育機関も含めて国民精神作興が求められる折、本報告書にも戦況報告会や防火演習などの実施状況が列記されているが、その最後は以下のような興味深い内容で締めくくられている。つまり、同大では、毎週もしくは隔週で一学級ずつ組主任の統率のもと、学長幹事、予科長、学生監、教授講師、配属将校が学生食堂の一部で学生と昼食をとり、「師弟共ニ肝胆ヲ吐露シテ談笑裡ニ公私生活ニ於ケル刷新自肅ノ方法ヲ講」じていたというのである。大学幹部と学生が交流するこの昼食会を、本報告書は「学生の訓育上最モ有効ナリ」と評価する。

太平洋戦争勃発直後の一九四一年四月には、上智大学修練報国団が発足した。同『上智大学史資料集』補遺所収、

一九四一年二月起案の団則によると、報国団は大学総長を団長、学生生徒と教職員を団員とするものであった。団の目的は「全学教職員学生生徒ヲ以テ一元一体タル組織ニ依リ教学ノ本義ニ基キテ修練ヲ積ミ教育ノ全般的効果ヲ發揮スル」ことで、団内には集団修練部、鍛錬部、国防訓練部といった戦時ならではの部のほか、生活部や、学術、芸能、興亜、語学習練、団報編輯といった諸事を統括する文化教養部も設けられた。また、集団修練部は、総務部の企画に基づいて、「学生道の振作向上」「勤労作業」「合同鍛錬」、そして「合宿訓練」「剛健旅行」を計画実行する部であった。一九六六年の上智大『報告書』にある、戦前に実施された教員と学生参加の合宿・旅行は、これに該当するものと思われる。名目はともかく、もしかしたらこの時点でも一九三七年「国民精神総動員実施ニ関スル報告書」にあるような和やかな「独特な雰囲気」が残っていたかもしれない。とすれば、教職員と学生の垣根を越え、同じ大学に所属する者として互いを認識する昼食会や合宿、旅行は、戦後の学外オリの前身と言えるだろう。

### 上智大オリキャンの前身（二）

上智大オリキャンのもう一つの前身と考えられるのは、一九五九年から一九六四年まで実施された「リーダーズキャンプ」である。『上智大学史資料集』第Ⅳ集によると、これは学生会に所属する各課外活動グループの指導的立場にある者が教職員と数日間共同生活を送る活動で、学生部長が提案した企画であったが大学が主導するものではなく、学生の自主的活動を大学が支援する形をとっていた。その目的は、大学、教職員、学生の信頼構築、課外活動の意義の探求、愛校心向上といった、戦前の昼食会等に共通するものであったが、学生の間で日米安保条約改正反対運動が起きる一九六〇年前後に実施された「リーダーズ キャンプ」の目的として「真の学生像の把握」が

挙げられているのは、注目される。

### おわりに

上智大の全学的オリキャンが現在まで継続しているのに対し、南山大の全学的オリは一九七一年に終わった。両大学が違う道を進むことになった理由はいくつか考えられる。ひとつは、開始にいたるまでの経緯である。上智大のオリキャンの創始は、戦時中からの教職員と学生の交流の土台の上に生まれた、内生的なものであったが、大学としての歴史の浅い南山大の場合、目的はどうあれ、上智大の影響を受け、その方法を倣う形で始まったものであった。また、当時の評議会内でも指摘されていたように、大学の規模や組織も異なる。上智大では職員である学生局長が中心となって動いている模様であるが、南山大では教員である学生部長を中心に教授会選出の委員が中心になって動いていたように見受けられる。南山大が学外オリを始めた頃は、学内の学生運動が過激化の一途をたどる時期でもあり、その対処のための臨時教授会も定例を上回るほどに開催され混乱していた。対話を重視する学生部が学生会と折衝し学外オリの場で学生会が自ら主張する時間を設けたのにも、二回目以降の実施方法を検討する際に教員の一部から疑問視する声があがっていた。こうした様々な要素が絡み、南山大学の学外オリは停止にいたった。ただ、上智大でもやはり一九六〇年代末には学生運動が活発化している。上智大のオリキャンは、これをどのようになり越えて継続させていったのだろうか。

南山大の学外オリの開始と停止の経緯と背景を調査する中で、はからずも他校史の資料をもみることとなった。大学アーカイブズの活用法として、そのアーカイブズを所有する教育機関の自校史教育への利用があるが、他校史

から自校史を知ることできる。上智大と南山大は現在も上南戦などで強い繋がりをもっている。アーカイブズにおいて、両大学が連携することで相互の自校史研究の深化が期待できるのではないだろうか。



## 部局史（外国語学部）編集所感

宮原佳昭

このたび南山大学七十五周年記念誌の編纂に携わることができ、大変光栄に思っております。部局史の各学科の文章は、各学科の有識者の方々にご執筆いただきました。各学科の概要が端的にまとめられた素晴らしい内容とします。ご執筆いただいた皆様に改めて心より御礼申し上げます。

本文では、一教員として、また歴史研究者として、所感を述べたいと思います。

一教員として言えば、私は二〇一一年四月に外国語学部アジア学科へ着任し、十年目の区切りに今回のお仕事をいただきました。外国語学部に関する個人的な体験を振り返ってみると、第一に、外国語学部創設五十周年記念行事の一環として中国語劇に携わりました。周錦樟先生による学生指導に同席したり、中裕史先生と一緒に小道具を買いに行ったり、日本語字幕や効果音を一人で準備したりしたことが懐かしく思い出されます。

第二に、二〇一五年度から二〇一七年度まで、キャリアデザイン科目の運営に携わりました。当時は各企業への連絡や講師任用手続き、当日の授業運営など、一つの科目としての負担が大きいことに不満を感じる一方、私自身が学生のキャリアについて考えるよい機会となりました。このたび教授会資料、自己点検評価委員会報告書な

ど外国語学部に関する資料をめくるなかで、キャリアデザイン科目を作った方々の苦心に触れることができ、大変勉強になりました。今後は座学だけでなく、インターンシップを新設するなど、キャリアデザイン科目をより一層充実させたいという思いを新たにしています。

第三に、二〇一四年度より学部将来構想ワーキンググループの一員として、また二〇一六年度から二〇一七年度に学部教務委員として、学部改組に携わりました。当時は外国語学部が置かれている状況を完全には理解できないまま突き進んだものですが、このたび一連の資料をめくってみると、志願者数の減少や外国語学部共通科目の問題点など、長年の問題が山積していたことがよく分かりました。これらの問題は改組後も解消しきれていないわけではないと思われまます。

歴史研究者として言えば、私は中国近現代の教育史を専門とし、中国で編纂された各地の学校史を資料として分析しています。そのため、このたび大学史を編纂する立場になったことは、感慨深いものがあります。

資料として学校史を見た場合、できあがった学校史は紙幅の制限などもあって、起こった出来事の羅列になりがちです。また、学校史を編纂する目的に沿うよう、列挙される出来事はその学校を顕彰するためのものに偏りがちです。これはこれで事実確認作業のために極めて重要なのですが、歴史研究者として興味があるのは、画期となる学校行政政策の決定過程です。すなわち、政策決定にあたって、どのような人物が関わり、彼らはどのような立場から、どのような議論を展開したか、などです。

例として、私は外国語学部の部局史のなかで、二〇一七年度の改組において、二〇一三年度に学部将来構想ワーキンググループが設置されたことに言及し、「ワーキンググループでは、学科の新設・統廃合やデュアル・ディグリー導入などさまざまな案が検討されたが、結果として採用されたのは、二専攻制の導入、海外フィールドワーク

の準必修化、学部共通科目の見直しなどである」と記載しました。もし私が研究者としてこの部分を読んだ場合、興味が出てくるのは、ワーキンググループの構成員は誰か？ 構成員にはどのような派閥があったか？ 決定までにどのような議論があったか？ などで、ここまであつたか他人事のように述べていますが、実のところ、私自身がこのワーキンググループの構成員の一人でした。ただ、当時の記憶があいまいで、どの問いに対してはつきりと答えることができません。七十五周年記念誌を作成することが当時から分かっていたら、メモを日々残したことでしょうが、当時は日々のことに精一杯で、それどころではありませんでした。

余談ですが、部局史を執筆後に読んだ石川禎浩『中国共産党、その百年』（筑摩選書、二〇二二年六月）によると、一九二一年七月に開催された中国共産党第一回大会の参加者の顔ぶれと会期については、当時の資料は非常に少なく、参加者した代表の名簿も残っておらず、回想録の内容も曖昧模糊としているとのこと。その大会に参加した毛沢東も、開幕が何日であつたかハッキリとは思いませんし、月初めの日を中国共産党の創立「記念」日としたそうです。「当時上海に集まつた代表たちは、北京しかり広東しかり、誰もが遠路はるばる上海の大会にやつて来たわけだが、どうやらその会合の期間中、会議の日がちが歴史上非常に重要な日となるという自覚を欠いたままで終始したらしい。これはこれで、当時の共産党員の意識をリアルにうかがわせる話ではある。」（四十六頁）という記述に、そうだそうだと納得したものです。

もし私が学部将来構想ワーキンググループに関する部分をもっと詳しく研究したい場合には、別の資料にあたる必要が出てきます。まず重要なのは同時期に作成された一次資料、すなわち外国語学部教授会記録です。これは外国語学部事務室に保管されているので、これにあればワーキンググループの構成員はすぐに判明します。また、同じく教授会記録には、ワーキンググループからの中間報告や最終報告が残されているので、これを追うことで、

ワーキンググループにおける主要な議論の経過が分かります。それではここから先、毎回の会議でどのような議論がなされたかについて、毎回の議事録があればよいのですが、まず外国語学部事務室にはそれが保管されていません。そもそも、毎回の会議で記録係がいたかどうかも定かではないため、議事録が存在しているとしたら、議長や参加者が私的に作成していたものでしょう。当時のワーキンググループの構成員にお声がけすれば、見つかるかも知れません。

このほか、当時のワーキンググループの構成員はどのような派閥に分かれ、それぞれどのような意見を持っていたかについては、もともと興味深い題材の一つでありながら、公的な記録には残りがたいものです。ここからは、回想録やインタビューの順番でしょう。もちろん、気をつけなければならないのは、上記の私的な議事録にしてもそうですが、自身に都合のよい部分のみを強調したり、都合が悪いと思われる部分を削除したりする可能性があることです。例えば、もし私がワーキンググループに関する回想録を残したりインタビューを受けたりしたら、おそらくその内容の大半は、共に過ごした「戦友」たち（彼らのうち数名は他大学または他学部へ移籍しましたが、ありがたいことに今も交流は続いています）との思い出話や愚痴になると思いますが、私が語る内容は、あくまでも私から見たワーキンググループであり、それが果たして事実をどれだけ反映しているかは怪しいものです。

回想録やインタビューは、他の資料でクロスチェックするなどの資料批判を経ることによって、一次資料などでは分からないことを解明するための重要な資料となり得ます。そこで、私としては、完成した七十五周年記念誌を外国語学部の教員一同にご覧いただいた上で、その内容に関する所感や回想録をぜひご執筆いただき、それらを取り上げて南山アーカイブに保管するのがよいと考えています。きつと、百周年記念誌を執筆する上で、また南山大学外国語学部史を研究する上で、重要な資料になることと思います。

## 南山大学七十五周年記念事業、「ライネルス中央図書館構想」について

山田 望

二〇二二年五月、南山大学七十五周年記念事業の一環として、長年の懸案であった図書館のリニューアル事業を立ち上げることとなり、図書館長兼、大学七十五周年史の編集委員でもある私が旗振り役となって、この事業企画のためのワーキング・グループを立ち上げると共に、「ライネルス中央図書館構想」の構想文をまとめ上げることとなった。学園創立者のヨゼフ・ライネルス師の名前を冠した中央図書館と命名することが先に決まっていたため、ライネルス師の生涯と功績について調査することから始め、加えて、本学にふさわしい図書館のあるべき姿とはどのようなものであるのか、との課題を設定し、最終的に、次のような理念の下に図書館構想を提示することとした。「であう」「つながる」「かわる」―地の塩、世の光として真のイノベーションを求めて―。以下は、この理念の下に作成された「ライネルス中央図書館構想」の構想文である。

## 1. 学園創立者ヨゼフ・ライネルス師の功績

一九三二年に南山学園の母体となった旧制南山中学を設立した神言会のヨゼフ・ライネルス師は、学校設立のモデルとして、当時の新教育改革の流れを汲む一九一七年創立の成城学園の自由教育と一九二九年創立の玉川学園の全人教育とを指摘し、偏狭な愛国心や儒教精神ではなく、キリスト教主義に根ざした自由闊達な全人的一貫教育を目指した。その方針は、一九三〇年に世界を襲った経済恐慌により、日本でも財政危機下において比較的支持を得やすかった実利優先の商業学校の設立ではなく、あくまでも文系・理系・社会科学系全般を網羅した普通科旧制中学の設立に拘ったことや、四年後の一九三六年に少人数学級編成による南山小学校の設立を実現させたことにも、ライネルス師のキリスト教主義に基づくリベラル・アーツ中心の全人教育への拘りが終始一貫していたものと看取できる。

他方、学園創立より二五年遡る一九〇七年、ライネルス師三三歳の時に母国ドイツのボン大学に提出し哲学博士号を取得した学位論文（邦語訳は、九州大学の稲垣良典教授の翻訳により『中世初期の普遍問題』として一九八三年、創文社から出版）は、それまでの思弁や類推のみに依拠した名だたる碩学たちの通説を、原典からの緻密な実証分析によって悉く論破・退けようとした画期的な研究論文であり、その著者名と論文名とは、ジルソン『中世哲学史』、コプルストン『哲学史』、アメリカ・カトリック大学編『新カトリック百科事典』にも記載され、旧態依然とした欧州中世哲学界に变革の一石を投じたと称されるほどの功績であった。本書を紐解くならば、全く新しい初期スコラ哲学の見取り図を新たな方法論の確立をも含めて学界に提起しようとした、きわめて斬新かつ大胆な变革をいささかも厭わないとの、ライネルス師の並々ならぬ気概や気迫まで読み取ることができる。ドイツ人としては

言葉少なく温厚な性格で人当たりが良かったと評されるライネルス師は、実は、その内面に立ち入ると、実証的な裏付けが揃っていれば、従来の通説を全面的に覆すこともよしとする、真理・真実を求めて転換・変革を厭わないとの進取の気性の持ち主であった。

さらに、ライネルス師が、学園創立期の校友会誌『南山』の表紙や卒業記念アルバムなどに署名を求められる度に綺麗な筆跡で記していた、“*Seid edel, treu und gut*”（高潔忠実にして善良なるべし）とのドイツ語文は、文豪ゲーテによる“*Das Göttliche*”（神的なるもの）という詩の最初の六行からヒントを得たもので、そこには、“*Edel sei der Mensch, hilfreich und gut; Denn das allein Unterscheidet ihn. Von allen Wesen. Die wir kennen.*”（人間よ、高貴なれ、人に尽くし、まことあれ！かくありてこそ人は、我らの識るいっさいの生きものより別たるるなれ」とあった。ライネルス師が機会あるごとに記した、“*Seid edel, treu und gut*”（高潔忠実にして善良なるべし）との標語は、後にポルト神父の提案により、“*Hominis Dignitati*”（人間の尊厳のために）という建学のモットーとして生き続けることとなったのである。（青山玄『ライネルス師とその人柄』平成六年、二一九―三〇頁）

## 2. 南山大学に求められる図書館像

以上のようなライネルス師の功績を念頭において、本学に求められる図書館像を思い描きつつ、日本の大学図書館のモットーに目を向けてみると、ある傾向に気づかされる。「知の交流拠点・開かれた大学図書館」（国立H大学）、「知と創造の新たなシンボル」（私立R大学）、「『共創の場』としての図書館」（国立M大学）、「智の蔵・智を蓄える、智をつかう、智をつなげる」（私立K大学）、「自らを一步高める情報館」（国立T大学）等等、圧倒的に「知」、「智」、

「情報」、「創造」という言葉が乱舞してはいるものの、そこには、「知」や「智」や「情報」を担い司る全人的存在としての「人間」そのものが欠落しているのではとの印象を拭えない。「知」も「智」も「情報」も、人間存在があつてこそ活かされるものであつて、人間から切り離された「知」、「智」、「情報」とは何であろうか? 「知」や「情報」の背後にはそれを担う「人間」存在のあることが欠落し、「知」が独り歩きしはじめた時、肝心の一人ひとり掛け替えない人間存在自体が忘れ去れてしまふのではないか? 換言すれば、人間を、「知」や「情報」やそれ以外のものにバラバラに切り分ける発想がそこには潜んでいる。

いまひとつ気づかされるのは、どのモットーも静的、スタティックな「知」や「情報」の集積の場としての図書館、「知」や「情報」を整理・管理する機能でしか図書館を捉えていない。ライネルス師自身がそうであつたように、変化することを厭わず、自由闊達にして、高潔なる存在たることを求める思いが、“*Seid edel, treu und gut*” (高潔忠実にして善良なるべし)や“*Hominis Dignitati* (人間の尊厳のために)”というモットーの内に込められているとすれば、図書館は、動的、積極的に、人や社会が変化・変容をきたし、それによつてダイナミックなイノベーションを生起させることを目指すべきではないのか? もはや、単なる「知識」や「情報」を整理・管理していればそれで良いとするスタティックな機能に留まらず、大胆に人や社会が、そして世界がかわることを目指す動的でダイナミックな機能を備えた特別な空間となることが図書館には求められている。

人と人とが全人的かつ異質な存在として「であい」、「つながり」、そして自分自身が「かわる」ことで、社会に真のイノベーションをもたらす。そうしてこそ、はじめて「個」の力は「世界」の力たりうる。これからの図書館は、そして、本学の図書館は、人がそこに来て、自らを互いに発見し合い、新たにつながり合うことで、「地の塩」、「世の光」へと変化・変容をきたす空間であり、ともに「かわり」つつ、全く新しいイノベーションがそこから生

まれることを真にサポートする図書館となるべきである。大学内の各学部、各研究科、各研究所、各センター、各部署がそれぞれの専門性や独自機能をそれぞれの場で深めつつ、しかもその上で、図書館で「であり」、「つながり」、「火花を散らしながら新たなコラボを経験すること、革新的イノベーションを世に生み出すべく互いに「かわる」ことをよしとする。そのような化学変化を生起させる触媒のような作用を図書館は担うべきである。一部署では不可能だったことが、図書館で複数の部署が「であり」、新たに「つながる」ことで、できなかったことができるように「かわる」、そのような限界突破を飛躍的に可能にする酵素のような働きを、本学図書館は果たすべきである。単に、大学キャンパスの中央に位置するからというのみならず、単に各単位校図書館の総代の役割だからというに留まらず、そのような触媒反応や酵素作用をもたらす中心的存在としてこそ、本学図書館は中央図書館の名に相応しく、学園創立者ライネルス師の思い描いた学園の姿を体現する図書館として生まれ変わるべきである。

以上